

高垣先生とケインズ卿

松 坂 兵 三 郎

一、ケインズ『貨幣論』『一般理論』と高垣寅次郎先生

かのケインズ John Maynard Keynes は一八八三年六月五日、当時ペンブローク・カレッジ（ケンブリッジ大学）のフェローであった父ジョン・ネヴィル・ケインズ John Neville Keynes と母フロレンス・エイダ Florence Ada の長男として、イングランドの由緒ある大都市ケンブリッジ・ハーヴェイ・ロード六番地に生まれた。

これに先立ち、同年二月八日には、当時のオーストリア・ハンガリー帝国、現チエコスロバキヤ領、モラヴィア地方のトリーシュ Triesch でシュムペーター Joseph Alois Schumpeter (1883-1950) が機械業者の息子として誕生している。また同じ一八八三年の三月一日には、あのマルクス Karl Heinrich Marx (1818-1883) が亡命先の英京ロンドンの陋巷において六五歳で客死した。時恰も明治一六年、わが国では悪名高い鹿鳴館が開かれ、前年の東京専門学校（早稲田大学）に続いて、東京高等商業学校（後の東京商科大学、現一橋大学）が設立されている。

わが国でもいくつかの経済新聞や専門誌がケインズロシウムパーティー生誕百年・マクルス死後百年記念号を特輯したのは三年前の昭和五八（一九八三）年のことで、あれからまたぞろ J・M・ケインズかと、いささか気の抜けた清涼飲料の感はまぬかれないが、ひいていえば、J・M・ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』*The General Theory of Employment, Interest and Money, Macmillan & Co., Ltd., London, 1936* の刷上りが未装丁のまま幾人かの関係者に配られたのが既に一九三五年の二月だし、その正式刊行が一九三六年二月だから、昭和六〇年から六一年にかけては、丁度『一般理論』発刊五〇周年記念にあたる。更に、彼がサセックス州・テイルトンの私邸で心臓発作のため波瀾にとんだ六三年の生涯を閉じたのが一九四六年四月二一日、イースター・サンデーであったから、本年（昭和六一年）は昨年（昭和六〇年）の太平洋戦争終結後四〇年に引き続き、ケインズ没後四〇年ということになる。

それよりも筆者にとつて、またわが成城大学にとって新たなメモリーの中に銘記されねばならないのは、日本学士院会員・一橋大学名誉教授・成城学園名誉学園長・元成城大学長、高垣寅次郎先生の逝去である。高垣先生には去る昭和六〇年八月二五日（日）午後一時五三分、予て入院中の渋谷セントラル病院において急性心不全のため鬼籍に入られた。享年九五歳。まさに大往生である。同年八月二七・二八日大森の光教寺にて通夜ならびに密葬、次いで九月二八日（土）午後一時より先生の成城学園葬が五十周年記念講堂において湿やかな裡にも盛大にとり行なわれた。

既に旧聞に属するかもしれないが、高垣先生が貨幣金融論の泰斗であるのはいうまでもないとして、J・M・ケインズの日本への事実上の紹介者、ケインズ経済学導入の先達であったことは知る人ぞ知る。鬼頭仁三郎訳・

ケインズ『貨幣論』（全三巻、一九三〇年、邦訳五分冊、昭和七―九年、同文館）、塩野谷九十九訳、ケインズ『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』（一九三六年、邦訳初版昭和一六年、東洋経済新報社）は高垣先生の強い懇慫によるものと、かつて今は亡き岡教授のゼミナールに奇しくも参加して親しくうかがう機会があった。

鬼頭仁三郎訳・ケインズ『貨幣論』第一分冊の巻頭にかかげられた高垣先生の（推薦）序には、ケインズと本書の特徴それに訳者にふれて次の如く述べられている。

貨幣理論並に貨幣政策論の領域……で……劔橋学派が……本質論に於ては指図証説をとり貨幣の意義を広く理解して銀行貨幣と呼ぶるものをもその範囲内に包容するの結果、貨幣政策の問題は同時に信用政策の問題となる……。

劔橋学派を率ゆる中堅ジョン・メイナード・ケインズ……は……マアシアル門下の俊秀として、経済学に対する深き認識に加ふるに数学的教養を以てし、一九一三年、印度金融通貨委員に任命せらるると前後しては、印度の通貨及金融の著書を以て学界に卓越せる地位を打ち立てた。欧州戦争当時より戦後にかけては政府当局のために献策を怠らず、賠償問題に就ては一方の権威として重きをなした。一九二三年、金本位帰還の問題を繞りて世論の紛糾せるさなかにおいて、統制〔管理〕通貨の提案を立てて雄大の論陣を張ると共に、貨幣金融学者としての地位を彌よ揺ぎなきものたらしむるに至った。斯かる学問的貢献を基礎として大著貨幣理論は築き上げられ……た。

……スタンプの如く之を以てリカードオ以来の時代を劃する著述となすは或は過ぎたるべきも、……動もすれば閑却せられ勝ちなりし、一均衡状態より次の均衡状態に推移する上に見らるる変化の過程を究め、価格水準の動態論を明らかにせんとする点に最も著しい特色が見られる。……貨幣問題の研究者は単に之を読むことを要するにあらずして、忠実に之を検討することを必要とする。早急の論結を得んとする者は恐らくこの書を繕いて失望を感ずべく、思索の成果を築まんとする者

高垣先生とケインズ卿

にして始めて、この中に咀嚼すべき滋味を求め得るであろう。そこには通行の経済理論に対する多くの酷評があり、金融業者に対する多くの反対説が見出される。ピグウ教授が之を評して、「マアシャルが他人の論述の中に事実以上に多くの真理を認め、自らの貢献を不当に低く評価したことは恐くは錯誤であった、ケインズにありてはその種の錯誤はない」と述べたのは、最もよく両者を理解するの士として穿ち得たところがあるのであろう。構想は精緻を極め、論述は簡易ならず、或る点に於ては過度に難解にせられた憾みがないではない。然しながら訳者その人を得て、茲に最も接近し易き形式に於て、この書が我邦の読書界に移入せらるるに至れることは、誠に慶賀に堪へないところである。

訳者鬼頭商学士は稀に見る篤学精励の士である。孩子として倦むを知らず、声名を求めず、真に学問を一身のこととして樂しむとは正に斯くの如きを云ふのであらう。その推究に精しくして些事尚ほ苟も断ぜず、理路整然として裁断を誤らざるの態度は、学問の事を談じて予の毎に感ずるところ、従つてその業績に対しては至大の信頼を払はざるを得ない。先にケインズの大著貨幣理論の現はるる旨を伝へらるるや、予は久しくその構想に接するを樂しみ、其の到来するや、論述の精巧にして斬新の構造を有することに心を惹かれた。之を我国に紹介するは、理論實際の両方面に尠からぬ刺戟を与ふるものなるを信じた。仍て東京商科大学の有志学生諸君に対して輪読の機会を作ると共に、鬼頭君の適材に倚頼して奨むるに本書の完全なる模範訳を作り、之を我が読書界に送るの意義甚だ大なるべきを以てした。訳者は精励その業を進むると共に、之を邦訳するにつき原著者の許諾を求めたるに、多大の信頼の下に立ちどころに快諾を与へられしのみならず、その巻頭を飾るべく特に邦訳書の序文を寄せられた。……

(昭和七年五月 東京郊外池上にて 高垣寅次郎)

また邦訳ケインズ『一般理論』の冒頭、訳者序の六に曰く、「本訳書の出版は全く恩師高垣寅次郎博士と東洋経済新報社社長石橋堪山氏の絶えざる激励と好意とに負うてゐる。殊に両氏を中心として開かれたケインズ研究

会が訳者の蒙を啓くに役立ったことは極めて大きい。」と。(昭和十六年十一月 鹽野谷九十九)

ちなみに、右ケインズの主著^二は英王立経済学会編『ジョン・メイナード・ケインズ全集』全三〇巻 The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vols. I-XXX, Macmillan & Cambridge University Press for the Royal Economic Society, 1971—の第V・VI巻と第VII巻として新たに上梓され、この新標準版をもとに、小泉明・長沢惟恭訳『貨幣論I』、『貨幣論II』(ケインズ全集、5・6、東洋経済新報社、昭和五四・五五年)ならびに塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』(ケインズ全集、7、東洋経済新報社、昭和五八年)が再刊された。小泉・長沢両教授は一橋大学名誉教授・故山口茂先生門下であり、塩野谷祐一一橋大教授は奇しくも名古屋大学名誉教授・故塩野谷九十九先生の次男である。

二、 わがケインズ事始め (1)

その塩野谷九十九教授との出会いは、私が横浜市立横浜商業専門学校(旧制、当時はY専といわれていた)に入學した昭和一五年に始まる。既に一年生の「銀行論」担当として、あの一八世紀末から一九世紀初頭イギリスにおける発券制度の改革をめぐる展開された地金主義対反地金の通貨論争つまり地金論争、さらに通貨主義対銀行主義の論争から説きおこす荘重な塩野谷教授の講義に、斯学に関しまるで白紙状態の私にとって最初の感銘的なカルチュア・ショックであった。後年気づいたことだが、私共はあの「白票事件」のおかげで東京商大における高垣先生の「貨幣金融論」を聴講する機会を逸したが——(もっとも戦後になって民主化・学問研究の自由化のおかげか、非常勤にせよ「経済哲学」の杉村広蔵氏や「文明史」の三浦新七先生それに専任として復帰された大塚金之助教授の「学

説史」に接することはできなかったが、高垣先生の講義もかくやと髣髴させるものがあった。

同時に第二弾のショックが私を襲うことになる。昭和一五年当時、支那事変は既に中国全土に戦線を拡大して泥沼の膠着状態にあったが、日米開戦一年前ということもあって敵性語追放には至らない未だ精神的余裕を残した時代で、一年D組の時間割に原書講読の配当があった。担当は同じく塩野谷教授、テキストはマーシャル夫妻共著 *Economics of Industry, 1877* の復刻版、その学年末試験の日であるから既に昭和一六年に入ってからである。テキストに即した型通りの英文和訳に続いて、最後に、*“次の意味を問う、Supply creates its own demand.”* という応用問題にぶつかった。直訳的には何の変哲もないこの英文が、試験に出題されるくらいだから経済学上何か重要な意味をもっているのではないかと想像はできても、何とも割切れないまま直訳してお茶を濁すだけにしかすぎなかった。その真意がどこにあったか、塩野谷教授の出題の意図が奈辺にあったか、臆気ながらも理解できるようになるまでには未だ一年余の歳月が必要であった。ケインズ・塩野谷九十九訳『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』が東洋経済新報社から出たのは「昭和十六年十二月十二日印刷・昭和十六年十二月十五日発行」（初版奥付、なお日米開戦は同年一月八日であり、●定価五円五拾銭というのも時代が偲ばれて興味深い）だからであり、われわれが事実手にできたのは真珠湾攻撃の緒戦の戦果に沸きながら迎えた昭和一七年になってからである。同書、第一篇緒論の第二章と第三章でケインズは、J・S・ミル『経済学原理』やマーシャル『国内価値の純粹理論』の一節を引用しながら、彼が後に徹底的に批判の鞭をあげせる「セイ法則」と名付けた古典派経済学のエッセンスないし予定調和論的「平行の公理」について次のようにのべている。

セイヤリカアドオの時代から、古典派経済学者達は供給がそれ自らの需要を創造すると教えて来た。——それは明確にさう規定されてゐるのではないが、その含意からすれば、生産諸費用のすべては必然的にその全部が直接、または間接に生産物の購入に費されなければならないことを意味してゐる。(傍点筆者)

……個人がその生産的活動の結果として消費したり保留したりする所得は……必然的に産出物の価値と正確に等しい価値をもつ……

(第二章、六節、邦訳初版、一三三、二六、二七頁)

……産出物の量が如何なる場合にも全体としての産出物の総需要価格はその総供給価格に等しいといふセイの法則は……

(第三章、一節、三三頁)

もっともこの訳文に接したからといって、その真意が本当につかめたかどうか疑わしい。小泉信三『経済原論』を通じて漸くA・スミスやD・リカアドオ、それに原書講読のテキストからA・マーシャルの名前は承知してはいたものの、もともと古典派経済学の何たるかを解さない初学者が「私の仲間たる経済学者達に呼びかけようとする」(原著者序)ケインズの挑戦にとてもこと堪えうる筈もなかったのである。したがって、私にとって古典派経済学とはまさにケインズのいうイギリス正統派経済学なのであり、マーシャルとはケインズのみるマーシャルだったのである。

わたくしは一九三六年よりまえに経済学者として生れてきたこと、および古典派経済学において徹底した基礎訓練をうけてきたことをつねになにももかえがたい幸福と考えてきた。適切にも「ケインズ革命」と呼ばれているものが正統派の

伝統のなかにおいて育ってきたわれわれにたいしてもつ十分な意味を認識することは、最近の学生にとってまったく不可能なことである。今日初学者たちがしばしば陳腐であり明白であると考えているところのものが、われわれにはわけのわからぬ新奇なそして異端的なものであった。

一九三六年以前に経済学者として生をうけていたことは幸いであった——まことにそうなのだ。しかもあまりに早く生れていなかったことが……

『一般理論』は三十五歳以下の大抵の経済学者を、思いがけない悪疫の害毒をもってとらえた。そしてまず南海の島民のなかで孤立した種族をおそい、多数のひとびとをたおしたのである。五十歳以上の経済学者はまったくその病気に感染しないことが明かとなった。この両者の中間にある経済学者は、大抵ときとともにその熱病に感染しはじめたが、しばしば自分たちの症状に気づかず、あるいははみとめようとしなかった。

(P・A・サミュエルソン「ケインズ卿と『一般理論』」、*Econometrica*, July 1946 所載の追悼論文、ただし引用はS・E・ハリス編、日本銀行調査局訳『新しい経済学』I、第二部、第三章による)

それ故、私共が完全雇用を常態とするのでない失業を含む不況の経済学として、有効需要の理論として、はたまた利子率決定ではない所得決定の貯蓄・投資理論として、「新しい経済学」に改宗というよりは感染するのはまことに早かった。高商一年生の身には「古い観念」にわずらわされただけ「新しい観念」への脱却は容易だったからである。ただし原書はもとよりのこと、訳文だけでも読み進むのはなかなかの難物で、中山伊知郎編『ケインズ一般理論解説』(昭和一四年)や高橋泰蔵『貨幣的経済理論の新展開』(昭和一六年)等のガイドなしには到底理解できる代物ではない。例えば、中山編『解説』のうち、有効需要の理論に用いられた横軸・雇用量、

縦軸・収入高プロシード（総売上金額）とする総需要函数のチャートすらはじめは珍糞漢で、「需要・供給の相互作用を手がかりとする価値の基本原理」の何たるかを十分に解しなかつた若輩浅学の身には宜なるかなといわねばならない。マクロ経済学のミクロ経済学的基礎が問われる最近の動向に徴すれば、中山伊知郎『純粹経済学』・マーンヤル『経済学原理』・ワルラス『純粹経済学要論』への回帰がむしろ迂回生産の利益に通ずる所以だったのかも知れない。そうすると、価値の理論と貨幣理論とが独立に併存する古典派的二分法を否定し、むしろその統合をおし進めようとするケインズの立場からは貨幣と利子が浮き上って、折角の流動性選好利子論が後退してしまふ恐れなしとしないのである。こんな思いで、原書と訳文さらには解説書の間をうろろしていた。鬼頭仁三郎『貨幣と利子の動態』、中山伊知郎『戦争経済の理論』が出たのも丁度その頃であった。

原書といえ、太平洋戦争も二年目に入った当時、Y専の図書館には *The General Theory* がたった一冊あったが、同じ塩野谷ゼミ仲間の畏友伊東政吉君（一橋大学名誉教授）といつの間にか相はかつて交互に何日かずつ借覽し合つて、その稀少価値の故か、専門原書の放つ不思議な雰囲気にはひたつたのは今は昔の物語りである。そのY専図書館もわれわれの学徒出陣中に、そして私の「貯蓄と投資」に関する拙い卒業論文ともども昭和二〇年五月の米軍B 29の大編隊による空襲で灰燼に帰したとか。その間、塩野谷九十九教授は終戦をまたずに名古屋商（旧制、現名古屋大学経済学部）へ移籍される。

三、わがケインズ事始め (2)

学徒出陣中のことは閑話休題して、一橋への復学をしてケインズ経済学との再会へ移ろう。昭和二〇年九月の

復員とその後六カ月に及ぶ横浜生家での蟄居生活から、昭和二一年四月の復学を契機に、鬼頭ゼミか中山ゼミかの選択に迷いながらも前者を選んだのは『一般理論』への執着があったからであろう。Y専時代から聞かされていたことだが、旧高垣ゼミにおける塩野谷教授の兄弟子として、はたまた当時ケインズ研究の第一人者としてつとにその盛名をうたわれていた鬼頭教授だったからでもある。昭和二一年度はケインズ『貨幣論』を輪読するということで、今更ながら鬼頭仁三郎訳の五分冊（同文館、昭和七・九年）が思い出されて、飢餓と軍隊ぼけをさらけ出したものである。そんな折、終戦後正式第一回の鬼頭ゼミ（毎週二時間、於図書館二階の教授研究室）をリードしたのが吉野昌甫君（現一橋大教授）であった。

『貨幣論』では、消費財の価格水準と全体としての物価水準とを規定する二つの基本方程式から物価水準の動態が分析される。物価水準は（単位当り）生産費と投資マイナス貯蓄という意味での利潤とによって決まり、生産費一定・投資イコール貯蓄（つまり利潤零）の場合に、安定的な物価水準となるのである。しかしながら早くも次のような自省と自己批判がとび出す。

……『貨幣論』を書き初めたときには、私はなお貨幣の作用を需要供給の一般理論とは別個のものとする伝統的な考え方に囚われてゐた。ところが、それを書き終へたときには既に、私は貨幣理論をば再び産出物を全体として取扱ふ理論にまで押し戻さうといふ方向にいくらか進んでゐた。……私のいわゆる「基本方程式」は産出高を一定と仮定しての瞬間的描写であつた。それは、産出高を一定と仮定した上で、利潤の不均衡を惹き起し、ひいては産出高を変化せしめる諸力が如何にして発展し得るかを示さうとする企てであつた。

したがって、次なるケインズの新しい意欲的な労作は既に『貨幣論』脱稿直後から始められたといえよう。一九三三・三四年のいくつかのケインズ・鬼頭往復書簡ではケインズはこれを『貨幣の純粹理論』*The Pure Theory of Money*と予告して、数カ月後の刊行を約したが、後一九三六年三月一八日付ケインズ宛書簡でその受領に対して謝意の表明された新著はまぎれもない『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』となっていたのである。『一般理論』生みの悩みはその刊行の思わざる遅延と書名変更に集約されていたのであろう。

『貨幣論』読書会の合間に、いつものチエン・スモーカーぶりを発揮している鬼頭教授に、同書邦訳者の教授が『一般理論』の翻訳をなぜ塩野谷教授に譲ったか尋ねたことがあった。あの「外国為替」の名講義からは想像もできない、かなり口ごもりながら、『貨幣論』の訳業を通じて、翻訳がいかに労多くして功少いかを身を以て体験した¹¹といわれた。今にして思は『貨幣と利子の動態』（昭和十七年）をつい失念して、いなく読みもしないでよくぞぬけぬけと質問したものと、汗顔の至りに思われる。また当時学校裏門前の佐野書院一階の寓居において、当時中野にあった先生宅をしばしば夜討ち朝駈けたその研究熱心さを称揚されると共に、われわれに対する鞭撻の辞とされたものである。

昭和二二年度はいよいよ『一般理論』を中心とする本ゼミに入ったが、同時にあのブレトン・ウッズにおける国際通貨協調をめぐる論議でのケインズの活躍ぶりや米英借款交渉でのケインズの行政的手腕、さらには遡って『戦費調達論』（一九四〇年）の論旨などが話題となり、折から貿易再開や日米間為替レートの問題とも重なって、

大蔵省出向・講演・執筆など鬼頭教授の商大外での活躍も多忙を極めた模様である。昭和二二年の夏休までではゼミ・講義とも順調に行なわれたが、同年九月上旬突如として東大病院柿沼内科に入院された。肝臓癌・白血病の疑いとか。夏休明けの登校時にこれを知って早速お見舞に出向いたが、残念乍ら九月二九日逝去された。享年四八歳である。終戦で世界の学会への門戸が再び開かれて、ケインズ研究者としてもこれからという時に、誠に惜しい方を失ったものである。同年十月四日午後、商大専門部講堂で学友葬がとり行なわれた。専門部（現一橋大経済研究所）正門入って右側に設営されたテント内受付けで、名刺を出された「高垣寅次郎」先生その方とその時初めてお目にかかる機会をえた。他方、鬼頭教授ゼミは自然解散、ゼミナール必修のため特例として他ゼミへの転籍が認められ、私は中山伊知郎ゼミへ移る。そこでのテキストがまたケインズ『一般理論』だったからである。私がハンセン・ヒックス流の *IS・LM* 分析、サミュエルソンの所得・支出四五度線チャート、クライン『ケインズ革命』（一九四七年）、ハリス編『新しい経済学』（一九四七年）、ヒックス『価値と資本』（一九三九年）、ランゲ『価格伸縮性と雇用』（一九四三年）、カレッキ『経済動学の研究』（一九四三年）、ハロッド『動態経済学への道』（一九四八年）などに接したのは、鬼頭教授亡き後、研究科をも通じての中山ゼミの学問的雰囲気に向うところ大であった。

ところで、鬼頭ケインズ経済学といえはまず「ジェネラライゼーション一般理論」と「フル・エムプロイメント全部雇用」に言及しなければならない。セイ法則で代表される古典派経済学は絶えざるフル雇用状態を仮定するが、こういう状態は理想的な究極点で達成されるにしかすぎず、実際はそれ以下のむしる失業を含むアンダー・エムプロイメントの状態こそが一般的であるから、このような一般的な状態（常態）を真正面からとらえる理論こそ、一九三〇年代の世界的危機を救う経

済学にふさわしいという認識であろう。しかもフル・エンプロイメントというのは、自発的かつ摩擦的であろうもならない失業を度外視した非自発的失業——現行の賃金で喜んで働きたいという意志もながら労働需要が不足するために不本意ながら職につけない状態——が存在しない状態であるから、無数の均衡状態の中での（究極点ではあるが）あるひとつの量的関係を意味するにしかすぎず、生産力つまりその質的内容を考慮した文字通り完パーフェクト全な関係ではない。有効需要が更に増加しても、もはや産出量も雇用も増加しえないような雇用量にしかすぎないので全部雇用だというのである。この点にははしなくもケインズ『一般理論』の静態性・短期性への批判に通ずることになるが、ここではむしろ資本主義経済の不安定性やそこでの期待・予想のもつ意味、さらには過去・現在・未来をつなぐ環としての貨幣の積極的な働きを強調したいからである、とみるのは私の僻目であろうか。

四、高垣先生の学園葬における経済学部代表の弔辞

この八月中旬、大学学生部から昭和六〇年八月一二日付の「学生生活」創刊100号記念夏期休暇特集号が郵送されてきました。昭和四〇年代初期の元学生部長——これは学長任命によるものです——その後昭和五〇年迄の元経済学部長は祝辞代りに「本誌が高垣学長の『学生生活』というあの題字をかかげて呱呱の声をあげたのは昭和四三年初夏の頃であった」にはじまり「昭和四四年春以降の大学紛争にあたり、当時他大学でみられた大学当局の強圧や機動隊導入とか学期末試験ボイコットのような非常事態、それに教職員学生間の暴力沙汰や学園諸施設の破壊が本学では全然なかったのは正に異例なことで、これは高垣学長の高邁な所信とすぐれた指教によるもの……」と結びました。高垣先生直筆の題字はあれから十七年間・100号にわたって今も「学生生活」（編集・発行・

成城大学(学生部)の表紙そのものとなっております。先生の訃報に接したのはこの100号記念特集号を手にしてから旬日後のことです。

戦中派ないし終戦直後派それから旧制大最後派である成城学園における私どもにとって、高垣先生は、日本学士院会員・一橋大学名誉教授・貨幣金融論の泰斗には違いありませんが、むしろ新制成城大学経済学部、それも(成城)大学設立委員会の頃からのアドバイザーないし顧問でしたし、後の成城学園長兼成城大学長であります。とりわけ、昭和四四年度になってからのあの紛争は、当時、高垣学長の現職学長として唯一臨時大学問題審議会委員就任をめぐってエスカレートしただけに、私どもにとって一層身近な存在となりました。一部学生の団交要求や授業放棄のスト宣言に対して先生は、何回かの所信表明を通じ、臨時大学措置法に基づき臨時大学問題審議会の意義を正しく評価しながら、「大学は学問研究の場、そのためには是非とも平和を……」と確信を以て主張し続けられました。また『明治初期日本金融制度史研究』(清明会叢書Ⅷ、昭和四七年)のはしがきにも次のような記述がみられます。「最近数年の間、日本だけではなく世界の多くの国において、大学の自由と自治を求め、大学の体制を革新することを目指すとして、多くの大学に不祥の紛争が起った。これは甚だ遺憾のことであったが、それによって何が得られ、また得られようとしているのであろうか。私が切実にその間に自覚しえたのは、研究教育こそは大学の使命であり、それによってはじめて大学の存在意義はありうる、ということのみであった。私はこのことに忠実であるように努力して、紛争の打ちつづく間にも、この書の完成に微力を注ぐことを怠らなかつた。これは爽かな時間を私にもたらした」と。実に傘寿を迎えられんとする明治人の気概と典型的な学者・研究者のお姿を目のあたりにする思いであります。

昭和四六年以降は名誉学園長として、それより遡って昭和四二年度大学院経済学研究科開設後は、金融論特殊講義・同特殊研究の担当として、名誉学園長室でのレクチュアが続きました。特に、経済学研究科・修士課程・博士課程の創設に当っては高垣先生の蔭乍らの絶大な御尽力があったとも承っております。それから昭和五二年夏、三号館三階に特別施設が完成、歴大な先生の蔵書が逐次寄贈され始めてからは「高垣文庫」の一隅に先生の研究室が移り、経済学研究科での講義をも含めて毎週木曜日の登校を楽しまれておられるご様子でした。私共も時々、昼食のサンドウィッチとレモンティのお相伴にあずかり乍ら、先生の学問研究のこぼれ話や思い出に耳を傾けたものでした。

ケインズ卿の『貨幣論』『一般理論』という二大名著の邦訳をめぐり、高垣先生と既に亡き鬼頭仁三郎教授と塩野谷九十九教授との師弟関係については今更喋々喞々の要はないでしょう。遡って、新庄博『金融理論の新傾向』（昭和一二年）、高橋泰蔵『貨幣的経済理論の新展開』（昭和一六年）が戦時中から終戦後にかけて、中山伊知郎編『ケインズ一般理論解説』（昭和一四年）、鬼頭仁三郎『貨幣と利子の動態』（昭和一七年）と共に、ケインズ経済学へのよきガイドブックでもあったのです。中山伊知郎教授を除き、いずれも高垣門下生の秀作ぞろいであります。日本における近代経済学は奇しくも貨幣的経済理論への道を既に辿り始めていました。また斯学研究上の一エピソードともいえるべきでしょうか、『一般理論』の原書自体が刊行当時定価五シリングという破格なものだったそうで、その世界的普及を期し、以後邦訳のロイアルティなしと認めたケインズ署名入りの手紙が、大森お宅の戦災で消失したとうかがったのは高垣先生御自身からでありました。

さて、先生は明治二三年の寅年、A・マーシャルの『経済学原理』初版の出た一八九〇年二月の生れですから

高垣先生とケインズ卿

満九五歳六カ月、本当に天寿を全うされたというにふさわしいでしょう。去る五月、渋谷セントラル病院に御入院とは漏れ承っておりますが、そのうち夏休にでもなったらお見舞を……、再び高垣文庫の研究室で饗饌たるお姿を……と念じておりました矢先のことと、残念至極・遺憾千万というのが今の偽らざる気持です。こうして先生の御霊位を前にしてみますと、ジョン・メイナード・ケインズというよりは、むしろ、当時の平均余命をはるかにこえて、しかも絶えず建設的かつ活きの永い研鑽を積み重ねられたあのケンブリッジの碩学アルフレッド・マーンシャルやアーサー・セシル・ビグーの遺影と重なってしまいますのは、孫弟子である私の僻目でしょうか。

『一般理論』出版五〇周年を来年にひかえ、この間、ケインズ革命・その反革命を経て時代は着実に変化しつつあり、マネタリズムへの傾斜ないし新貨幣数量説の巻きかえしと新古典派的ミクロ経済学の源流への新たな復位さえもささやかれる誠に賑々しい昨今のことであります。

この弔辞は本来ですと直弟子の岡田俊平本学名誉教授に托されるべきでした。その岡田教授が残念乍ら他界されて既に五年が経過しております。不肖不敏ではございますが、岡田教授になり代り茲に改めて先生の御冥福を心から祈念致すものです。

(昭和六〇年九月二八日 成城大学経済学部代表・成城大学大学院経済学研究科長 松坂兵三郎)